

こうした地域のコミュニティを支えている要素のひとつが、「公役」とよばれる地域保全活動だろう。この原稿を書くに当たって、地域のさまざまな活動を整理してみたところ、大きく分けて三つのタイプに分けられるよう

病気になっても、まず分かることはない。都会ならではのドライな関係。結局、地域の活動というものにほとんど縁がないまま、おとなになった。南阿蘇で夫とともに農業を継いで4年目。隣人の献立まで分かるような近所つきあいに最初はとまどいもあつたが、ほどなく慣れ、頻繁な交流が生まれるようになった。季節ごとにもらったりあげたりする野菜。

わが家に都会からの来客があると、「めずらしかろう」と手づくりの漬物やお菓子が届く。数日家を空けると、「どこ行つたの?」と笑顔で訪ねてくる。地域社会ってこんなにはばらばらなんだ、と何かにつけて思う日々である。



村の美化作業

話は変わるが、私たち夫婦が留学していたドイツにはきれいな人が多い。日本なら料理が上手だとよい奥さんと言われるが、ドイツの場合はコップがピカピカに

じつはつい最近まで、私は「公役」を「苦役」と書くこと勘違いしていた。どうしてそんな勘違いをしていたかは分からないのだが、すでに喜んでやるというよりも「やらなければ」という雰囲気を感じたからかもしれない。それでも作業が終わってきれいになると、清々しい気持ちになるものだ。作業の間や終了後にはビールやお茶を飲んでお互いの近況をたずねあう。これが地域社会の支えとなっているように私には思える。

「つせやるなら楽しみたい

「やらなければ」の公役から 「楽しめる」苦役、駆役、交役へ

プロセスを楽しむ地域の保全や活性化を

熊本県南阿蘇村O2ファーム
大津愛梨



南阿蘇で百笑生活を始めて4年目のKotaとEri。おいしいお水と新鮮な空気ですぐれた無農薬のお米「おあしす米」をつくっています。他に、あか牛やキュウリの生産なども

わがむらの三つの「公役」

「最近、じいさまの調子が悪くてねえ」「なに、うちも病院通いが仕事したい」「そういやナスの苗が余つたばってん、いるね?」

農村では、めずらしくもない会話。こんなやりとりでさえ、都会で育つた私には新鮮だった。

都内のマンションで育ち、学校は電車に乗って校区外へ。両隣の住人くらいとは挨拶を交わすが、同じマンションでも階が違えば顔さえ知らない人がいる。ましてやマンションの周辺に立ち並ぶ家との交流などほとんどない。ご近所さんが

に思えた。

- 一、集落の全世帯が参加する活動
……美化作業
- 二、集落の中で権利をもっている世帯が参加する活動……野焼き、墓掃除、用水路の整備
- 三、有志による活動……消防団、夏祭り、竹炭焼き

それぞれのタイプについて、紹介してみたいと思う。

全世帯が参加する「苦役」

「公役」と書くこと勘違いしていた。どうしてそんな勘違いをしていたかは分からないのだが、すでに喜んでやるというよりも「やらなければ」という雰囲気を感じたからかもしれない。それでも作業が終わってきれいになると、清々しい気持ちになるものだ。作業の間や終了後にはビールやお茶を飲んでお互いの近況をたずねあう。これが地域社会の支えとなっているように私には思える。

風物詩。焼けて真っ黒になった山肌からは数日もすれば新芽が始め、数週間するとすっかり緑になる。こうして一〇〇年以上の間、阿蘇の草原は守られてきたのだ。野焼きには、延焼を防ぐための防火帯をつくる草刈り作業と、実際に火を放つ火入れ・火消し



野焼き(上)と
野焼きの後の打ち上げ(下)

作業がある。どちらも山の斜面を何往復もする、体力のいる作業。終わった後のビールや焼酎がことさらおいし

い。

ところが最近、農家の高齢化や有畜農家の減少によって、作業を続けるのが困難な牧野組合が増えてきた。草原

がなくなったら、阿蘇らしさが失われるだけでなく、草原にしかみられない貴重な動植物が行き場をなくす。どうにかして大切な草原を守る作業を続けようという有志たちが「野焼きボランティア」として野焼き作業の支援をしている。「財団法人グリーンストック」

なっていることがよい奥さんの条件。町並みが美しいのも、そんな国民性が強く影響しているように思う。そんなドイツの農村の美化作業にまつわるエピソードをご紹介します。

ドイツには、「わが村は美しく」というコンクールがある。農村の人口が都市に流れ始めた一九六〇年代に、農村がだんだん活気を失っていくのを防ぎ、牧歌的な農村景観を維持することを目的としてできたコンクールだ。始まった当初は「花飾り運動」と呼ばれるほど、道路や建物を花で飾る活動が流行ったが、九〇年代からは評価項目に「伝統的農村文化や景観の保全」や、「農村生態系の生息空間保全(ビオトープの保全)」などが加わり、見た目の美しさ以上のものが求められるようになった。

住民自らが自分たちの村を魅力のあるものにする活動をすすめる過程とその結果によって、金賞から銅賞までが数カ所ずつ選ばれる。郡大会で受賞し

た村は州大会に出て、さらに全国大会へとすすむ、けっこう大がかりなコンクールなのだ。住民の中にはへそ曲がりや、「どうでもよい」という消極的な住民もいる。

ある村では、木製の垣根の色をそろえて雰囲気を統一しようとしたところ、どうしても一軒だけ同意してくれないことがあったという。他が全部統一されているだけにかえてその一軒が目立つ。コンクールの審査員が村を訪れる前日。その家の持ち主が寝ている隙に、他の住民がこっそり垣根にベロニキを塗ってしまったそうだ。住人は憤慨しながらも、審査が終わるまではそのままにしておいた。たかが垣根、されど垣根。地域住民が楽しみながら一丸となって村の美化作業に精を出す姿が好ましい。人に見られることで意識が高まるのは、どこの国でも同じなのだろう。

大規模な観光開発がされていない南阿蘇は、のんびりした雰囲気と美しい

景観のために人気が高まってきている。この人気を利用して観光開発をするのではなく、地域住民の活動によって温かみの感じられる景色や雰囲気が残せるといいなあ、と願ってやまない。

権利をもっている世帯が参加する「駆役」

全世帯が参加するのが「苦役」なら、二つめのタイプは「駆役」とでも書くのがふさわしい。野や山を駆ける活動が多いからだ。

その代表的なものが野焼き。阿蘇ならではの地域活動で、草原を保つための火入れ作業だ。日本一の面積を誇る阿蘇の草原は、「牧野組合」という、入会権をもつ管理団体が権利をもっており、阿蘇郡内に一七六もの牧野組合がある。阿蘇の草原が乱開発を免れたのは、この複雑な権利組織によるところが大きいように思う。

野焼きは、阿蘇に春の訪れを告げる



夏祭り



夏祭りの電力をBDFでまかなう

なかつたので、できあがったBDFを購入して発電した。発電機からはほ

うようになつた。住民は昼までに家庭で使つた天ぷら油を持参。祭りの会場である小学校のグラウンドに借りてきた精製機を設置し、約六時間かけて軽油の代替燃料をつくつた。できたてのBDFを発電機に入れ、照明や屋台の電力に。昨年は精製機を借りることができなかつたので、できあがったBDFを購入して発電した。発電機からはほ

「自分たちが住んでいる地域を盛り上げていこう」という有志による地域の活動も、地域社会や景観の保全に大き

有志による活動「交役」

ている。

く貢献している。青壮年部による夏祭りがそのひとつ。人の交流を図る活動なので、「くやく」と読むにはきびしいが、「交役」と呼ぶことにしよう。人が集まるお盆の時期に合わせて当時の青年団が夏祭りを始めたのはもう一〇年以上も前のこと。以来、毎年趣向を凝ら

した夏祭りが続いている。スタッフである青壮年部の間で人気が高いのがビール売り。売っている量より飲んでいる量のほうが多い気もするが、それもまたよし。祭りが終わった後の打ち上げは多めに盛り上がる。一昨年から、夏祭りに必要な電力を、使用済みの天ぷら油からつくるBDF(軽油代替燃料)でまかなうようになった。住民は昼までに家庭で使つた天ぷら油を持参。祭りの会場である小学校のグラウンドに借りてきた精製機を設置し、約六時間かけて軽油の代替燃料をつくつた。できたてのBDFを発電機に入れ、照明や屋台の電力に。昨年は精製機を借りることができなかつたので、できあがったBDFを購入して発電した。発電機からはほ



ススキは阿蘇のバイオマス資源

一方、ポランティアに頼るばかりではなく、草を積極的に利用することで草原の維持管理を続けようという活動をしているのがNP

末に。〇〇人以上のポランティアが野焼きのために阿蘇を訪れる。ゴウゴウと音を立てながら燃えるようすは迫力満点。地元の人たちとともに汗を流して国立公園の景観保全に貢献したあとは、温泉に入つてさっぱり。晩には交流を兼ねて杯を交わす。ぜひ一度体験に来ていただきたい(連絡先は記事末に)。

草がビジネスになれば地元産業の活性化につながるうえ、草を刈ることで野焼きの際に火が大きくなりすぎるのを防ぎ、作業がラクになる。「守る」という発想から、「使うことを守る」という発想へ。阿蘇を代表する公役である野焼きは大きく姿を変えようとし

という団体がコーディネイト役となり、都会からの野焼き支援者を牧野組に派遣する。講習も事務連絡も同財団が行なうため、支援を受ける牧野組が大変な準備をする必要がない。だが「都会からわざわざキツイ仕事

なんかしにくるはずがない」とたかをくくっていた地元。そんな予想に反してポランティアの数は年々増え、何度も足を運ぶ熱心な参加者も現れだした。野焼きポランティアの支援を希望する牧野組合も増え、今では年間一五

〇法人「九州バイオマスフォーラム」。ヨーロッパでは、わざわざ休耕地にススキを植え、再生可能なエネルギー資源として利用している国もある。他にもかやぶき屋根用のカヤや、牛のエサ、野草堆肥、などさまざまな用途があるススキ。ただ燃やしてしまうなんてもつたない! というわけだ。草がお金になるのであれば、草原は守られるだろう。従来の利用方法に加え、草壁の家を建ててみたり、灰を軸薬にして陶器を焼いてみたりと、新たな利用法の開発にもチャレンジ中。今年からは阿蘇市の温水プールで、草をガス化させることで電気と熱をつくる事業を開始している。

しみながら地域の保全や活性化につながる活動をしたものだ。楽しいなら、外からも人がやってくるかもしれない。そうすれば交流も生まれ、地域の活性化につながるだろう。
アイデアだけでなくほかにある。わが家では、無農薬のお米をつくるため



コイツカみ。「コイ農法」と「アイガモ農法」をかけて、「恋愛農法（コイとアイ）」と呼んでいるのですが、今年はコイが敗れ去ってしまいました。敵はサギ。コイ（恋）がサギ（詐欺）にやられたなんて、シャレのようですが、笑い事ではありません

効率がかえって下がるかもしれないが、地域を盛り上げていくために、今後いろいろ企画してみたいと思っていますところだ。
* * *
どうせやるなら楽しみたい。どうせ住むならいいところに住みたい。「やらなければ」の公役から、「楽しめる」公役に。定年帰農に加え、若者の農村移住が増えている今、新住民や都会からの来訪者が参加しやすいような、地域活動のあり方が求められているのかもしれない。

にコイを田んぼに放しているのだが、そのコイを田んぼから上げる作業をみんなでする、という案。コイを恋とかけ、「恋をつかもう！」というイベントにしたら、若い女性が集まりはしないだろうか？ 家族でやればただの農作業。みんなを呼べば交流の場。作業

■02ファーム 千八六九一―一五〇一
熊本県阿蘇郡南阿蘇村両井五八九
<http://www.aso.net/real/>
■財団法人グリーンストック 千八六九一―二二三二
熊本県阿蘇市赤水字大堀六九五一―〇
電話〇九六七―三五一一―一〇 FAX
〇九六七―三五一一―一五
<http://www.aso.net/green-st/>

んのりと天ぶらのおいが漂う。処理に困る使用済みの天ぶら油が燃料に！地元の新聞でも紹介され、面白い話題となった。
もう一つ有志による地域活動を紹介したい。私が住んでいる南阿蘇の中郷という集落では、今年から竹炭焼きが始まった。



技の伝承

炭焼き活動の中心となっているのは、「中郷青年の会」。この会、実は平均年齢が五〇歳を超えている。三四年前に当時の二十代青年によって結成された会で、青年のごとく若さを失わないように、と名称を変更せずに今に至っているという。メンバーのほとんどが農家の長男なのに、就いた職業はバ

ラバラ。月に一度は集まって語る機会を、という思いでつくられた。今でも、月に一度の「助け合い講」は続いており、地域活動の中心を担っている。昨年十一月の会で、炭焼きの提起がなされたのをきっかけに、手作り炭焼き釜で竹炭を焼く活動が始まった。
竹林は北海道以外の日本ではどこでも見られ、原風景ともいえる景観をつくっているが、手入れをしないとサルも入れないような藪になってしまう。そこで、手入れを兼ねて竹を炭にし、いずれば商品にして収益を地域に還元したい、というのが主催者の夢。また、伝統文化の継承も目的のひとつ。現在、集落内では炭焼きの経験者がただ一人（八〇歳）になっており、まだ農業の現役で健康な今のうちに、培われた技を継承してもらおう、ということだ。
こうした有志による地域保全活動は、発想とやる気しだいでいろいろできる。これまでの「公役」Ⅱ「苦しい、面倒な作業」ではなく、プロセスを楽